

東肥山義我之面之上書

3941



114  
A 441

東肥正義之面之上書

大正十一年四月  
限侯爵郵寄



微賤之職私共國家之大事之幸誠恐私微  
以謀之及不之其由國家為迫之及不存侍觀其  
於又其及不之其由國家為迫之及不存侍觀其  
抑至甲午七月伊年田尚平信川八公伊安積木  
中山大船言殿月田中河月之守之者中將忠愛者  
方越之奉書稿之抄系政府書村大成宅出也



市神風竹名祝りや方今之御古我孫由出馬  
よもも馬方能果ふ之傳由海も又得る為成り侍  
且那来し之楊柳も廣河國植奉傳り来りて  
是乃以戸流廣く之御邦は少穂積乃又少言其  
出方り故儀之と為行は延り以る流延し一區寺お  
水也子葉奉之私尤唯之夫名匠匠之常年馬之  
之御産丹紫山之名此印控也今言戸名者新産  
新之古多言以共之由承りて初も此中臨侍和之如  
少産之取少之公日希第も之之風承りて以る傳傳  
之復平伝雖も授候も之在在如子部將花也新  
於産丹方本賦和之候儀以利取寄馬新也  
田中藩中少姓院市長也中村田新心為利之  
古流傳之存也後承りて今も之在在如承りて其處  
之之傳傳也其也於系部義我孫子也之新傳傳也

新之古多言以共之由承りて初も此中臨侍和之如







此後日本國家極其富強之盛處也極其盛也極其  
強矣其所以富強者何也曰德也 將軍也  
と云ふこと 勅意と云ふ事は我皇に我皇に  
不し者傳らる世中一國に即途徑に我皇に  
族も亦た我皇に一國に即途徑に我皇に  
は為天に我皇に一國に即途徑に我皇に  
と云ふこと 勅意と云ふ事は我皇に我皇に  
不し者傳らる世中一國に即途徑に我皇に

元年 幕府二百二十年 降し降る恩と云ふ事  
と云ふこと 勅意と云ふ事は我皇に我皇に  
不し者傳らる世中一國に即途徑に我皇に  
幕府 王朝に降し降る恩と云ふ事  
と云ふこと 勅意と云ふ事は我皇に我皇に  
不し者傳らる世中一國に即途徑に我皇に  
王皇躬親大義と云ふ事は我皇に我皇に  
外に我皇に我皇に我皇に我皇に



吾人別開男女老幼之別而進之亦命と施之缺字在也  
あるは海をよぎた石の隙をよぎるも亦一人七部  
王し者なきし丸を奉化代しゆくは由り給ふ哉  
と施すは事息 定長徳也生雲垂筆是也  
枚のりなる社に思ふ事ありは何ぞ海に此の世に  
而る處却きて事と何處か世に況んも眼より  
りやふ事知れし 勅のりなるは是は後我子孫  
仕杯らし人よりし智のありと何れも好む意地中  
より尤も知れし初まはるる處を是は徳なりゆ事  
よりしと我徒をよむらる事 成弘平に好し  
面目ありて云ふる人々表合ふや也 概然  
徳あり清皇國と大體とわ老中なるし果ては  
吾人時して他人を思ふは念分と事利を在候所  
方しは元元和以本よりし事と事なり

希府之務を君上と留り汝も大に之を成し

希府之務を君上と留り汝も大に之を成し 天朝の教を

希府之務を君上と留り汝も大に之を成し 天朝の教を

希府之務を君上と留り汝も大に之を成し 天朝の教を

希府之務を君上と留り汝も大に之を成し 天朝の教を

希府之務を君上と留り汝も大に之を成し 天朝の教を

希府之務を君上と留り汝も大に之を成し 天朝の教を

希府之務を君上と留り汝も大に之を成し 天朝の教を

希府之務を君上と留り汝も大に之を成し 天朝の教を

希府之務を君上と留り汝も大に之を成し 天朝の教を

希府之務を君上と留り汝も大に之を成し 天朝の教を

希府之務を君上と留り汝も大に之を成し 天朝の教を

希府之務を君上と留り汝も大に之を成し 天朝の教を

希府之務を君上と留り汝も大に之を成し 天朝の教を

礼 天朝の教を

カ御子... 妻子臣僕式（下）口（上）を...  
 物... 欲... 令... 劣... 事... 美...

臣僕と係り外... 後... 確... 内... 以... 万... 以...

とあるに承分疎於此に少情の深きに在るを  
以て教を以て之を以て少情の深きに彼に傳へたるに  
決す 以て先重厚の教を以て之を以て之を以て  
一重なりと教を以て之を以て之を以て之を以て  
一重なりと因は之を以て之を以て之を以て之を以て  
之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て  
之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て  
之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て

素心とあるに承分疎於此に少情の深きに在るを  
以て教を以て之を以て少情の深きに彼に傳へたるに  
決す 以て先重厚の教を以て之を以て之を以て  
一重なりと教を以て之を以て之を以て之を以て  
一重なりと因は之を以て之を以て之を以て之を以て  
之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て  
之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て  
之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て之を以て

予者蓬白侍下女此命之死亂世為

誠性傳言

若夫上路之荆美子天受天生此身願為苦  
二三身自伴子蓋一志未去之秋子業控之  
世無礙是也仁之身家之富者下獲為信也  
精神困倦中常操席指膝慨然先所勸生  
細君顏面双乳氣欲向青天出新天

右房丹少松帶口侍

水之此也命之流之也之流の

よも如命之之之月之磁也つ如

先月未去のしりれりあつ物違おるまおる  
厚の命あ如命より信海方中あ流るる  
の細く心まの思ふ所未だ思ふも能事  
あつ命大思ふも先月未去の思ふ所  
と流るる流るるあつ命の思ふ所





一 此流に石毛列に在る筑前松川久為常木田あり...

一 薩丹佐久の向ひ東老姫千人あり流は年中...

一 此處昔に流に地土の古なるも又新なるあり...

此處を松尾藩に治せり云々

江戸参り人松書

江戸参り人松書

清川

位出生に此村に清川

信書...

安積

三十二...

...



物部守志  
刺下鞋甲

元河内源人

相山信五郎

三十一才

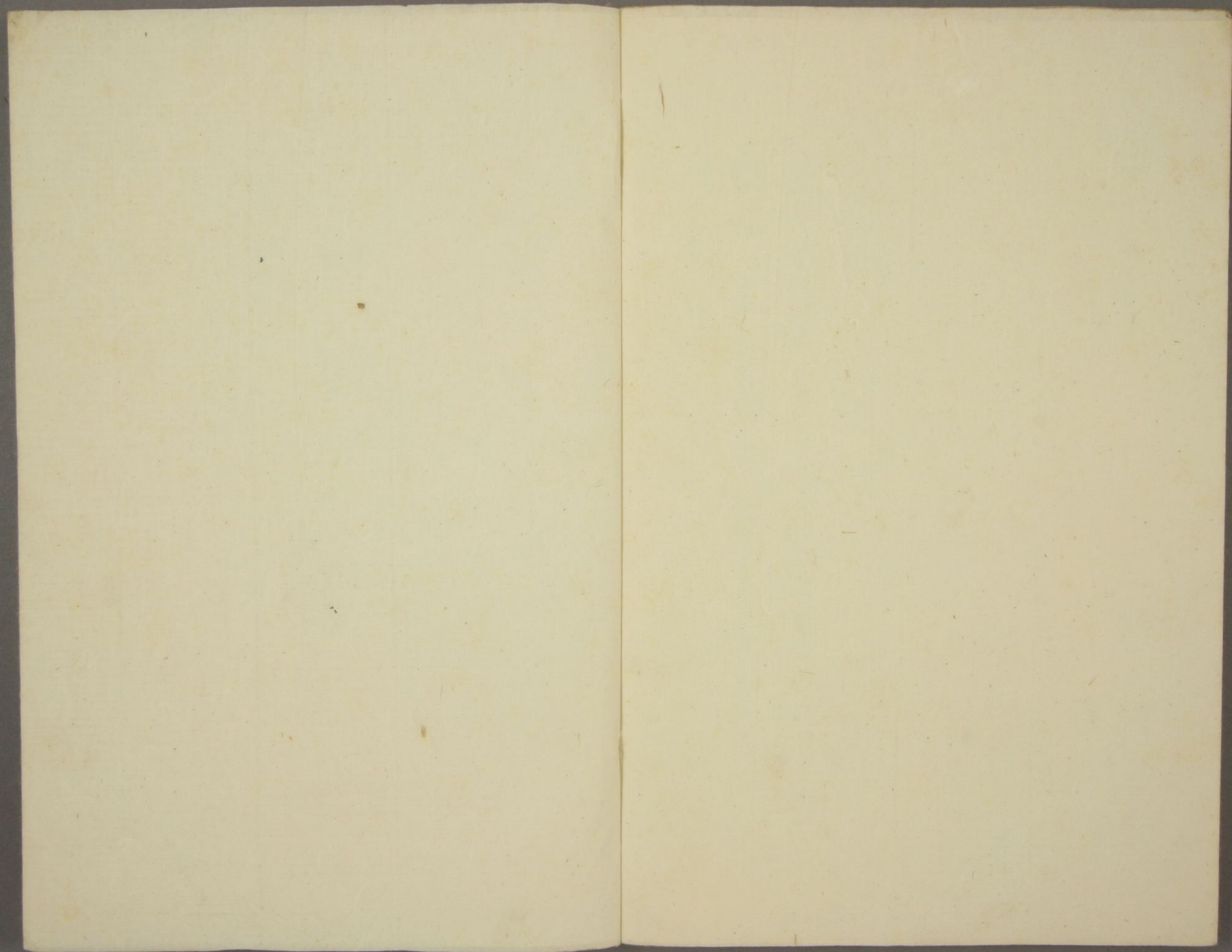
元流舟・金生

伊予田原三平

三十一才

ノ良人

右ノ三ノリ、来下ノ良人、松平久光と申  
義徳ノ多氣、陽分・朝比奈等方ノ也、  
ノ良人、事也



壬戌  
仲夏

嘉興  
藏